

益田市埋蔵文化財調査報告

鶴ノ鼻古墳群第50号墳発掘調査概報

1985.3

益田市教育委員会

序文

本書は、昭和58年7月の山陰豪雨災害復旧にともない埋蔵遺跡の調査について、米子鉄道管理局の委託を受けて、発掘にあたりました調査結果をまとめたものであります。

本調査地は、山陰本線石見津田駅西方500メートルの位置にある丘陵地で、ここは県下で唯一の群集古墳として知られる、鶴ノ鼻古墳群の一角であります。またこの一帯は、かつて明治維新の頃は54基という夥しい古墳を数えていましたが、大正11年に山陰本線の敷設工事の際に、多くの古墳が破壊され、現在では30余基を認めるにすぎません。

本調査の古墳は、『方基円墳』という全基のなかでも極めて珍稀なものです。しかし、かつて鉄道工事や災害等で、甚大な被害を受けているために、これら全容を明らかにすることがやや困難に思われましたが、幸い島根県史等の文献と比方しながら、これを悉知することができました。

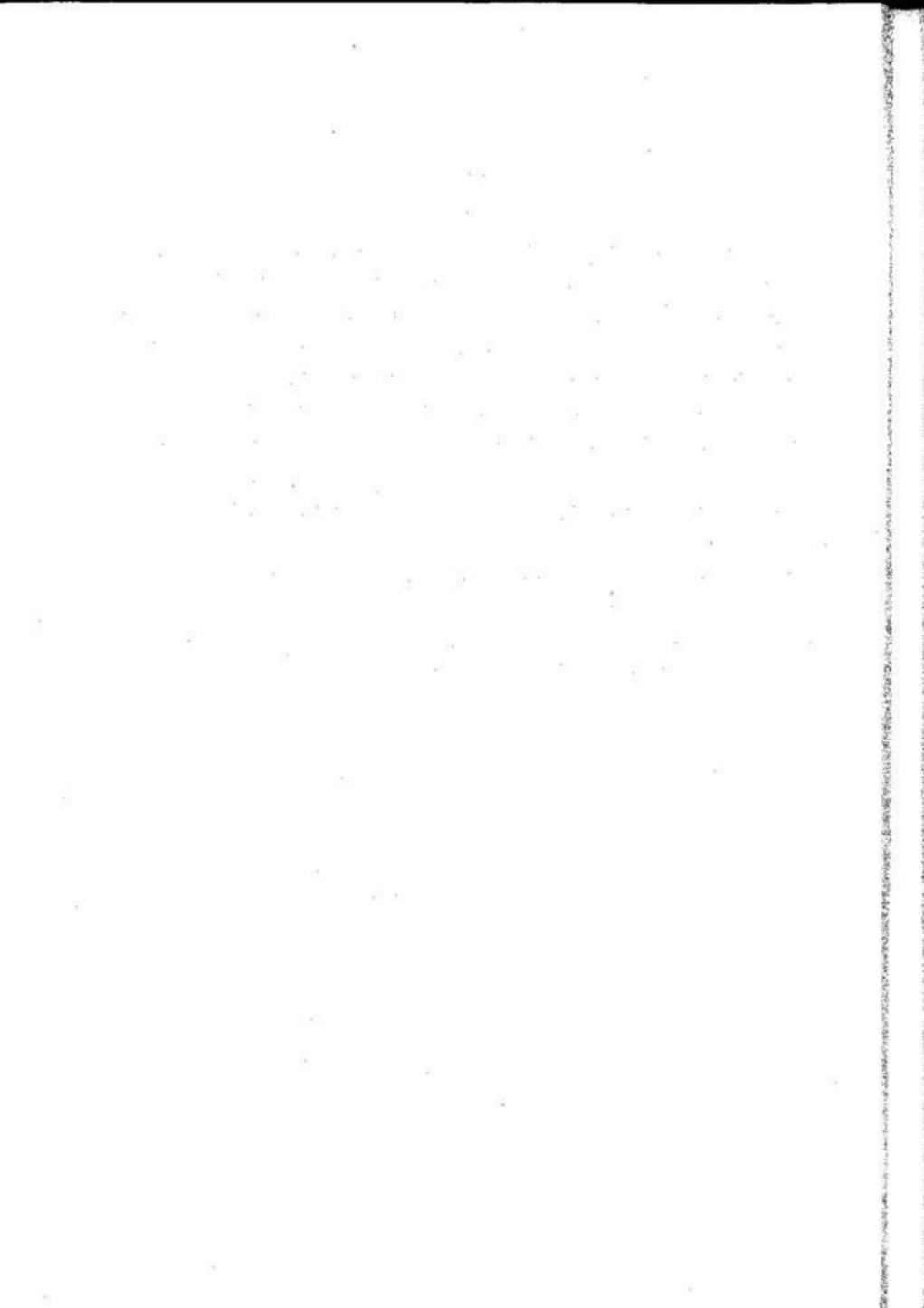
本書は、この調査の概要であります。広く各方面にご活用いただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にあたって、ご指導とご協力をいただきました島根大学助教授渡辺貞幸氏、島根県教育委員会、米子鉄道管理局、安田公民館長、地元関係者の方々に、厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

益田市教育委員会

教育長 水上 孫市



例　　言

1. 本書は、益田市教育委員会が日本国有鉄道米子鉄道管理局の委託を受けて昭和59年度に実施した、石見津田－益田間509 K450 M附近のり改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 調査は次のような組織で実施した。

調査主体	河重貞利	益田市教育委員会教育長
事務局	服部悦郎	益田市教育委員会社会教育課長
	森脇栄一	社会教育課長補佐
	徳屋典彦	社会教育課主事
調査員	木原 光	社会教育課主事補
調査指導	西尾克己	島根県教育委員会文化課主事
調査協力	発掘調査及び資料整理の過程で次の方々の協力を得た。	
	佐々木健一	渋谷源一 高橋好市 渋谷三枝子 高橋房子 伊田喜浩
	伊藤克己	渋谷秀文 大久保真紀 和崎幸子 潮 英夫 岡田靖生
	佐々井匠	寺沢 圭 永富 穂（順不同・敬称略）

3. 発掘調査中 渡辺貞幸（島根大学助教授）、松本岩雄（島根県教育委員会文化課）内田律雄（同）、西尾良一の各氏には種々ご指導をいただいた。また富山大学教授和田晴吾氏からも現地で助言をいただいた。記して謝意を表わすとともに、その意を十分生かしきれなかったことをお詫びしたい。
4. 調査実施にあたり、矢富善威氏（土地所有者）、米子鉄道管理局米子工事区、株式会社福田組、宮藤建設工務所の方々から終始多大な協力を得た。記して感謝する。
5. 石材の材質鑑定は、田中幾太郎氏（高津中学校教諭）にお願いした。
6. 掘岡中の方位は、すべて調査時の磁北である。
7. 参考文献は本文の末尾に一括し、引用はその番号で示している。
8. 本書の編集・執筆は木原が行なった。

目 次

I はじめに	1
II 位置と周辺の遺跡	1
III 発掘調査へ概要	4
IV 方基円墳について	7
V おわりに	8

I はじめに

昭和58年8月初旬、山陰本線の法面改良工事の着工にさきだち、米子鉄道管理局から周知の遺跡における土木工事について協議があった。工事区域は鶴ノ鼻古墳群の立地する丘陵を分断して敷設された山陰本線の沿線にあたり、遺跡の存在する可能性がきわめて強いと予想された。そこで益田市教育委員会担当職員が米子工事区長と共に、現地を踏査したところ、古墳1基が発見された。文献によれば、一帯には計6基の古墳が存在していたらしいが、山陰本線の敷設や近年の宅地化などにより徐々に消滅してしまったと思われ、この古墳以外に遺跡を確認することはできなかった。

以後、遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、米子鉄道管理局の意向は終始、法面整形のため墳丘の一部を削り、さらに残る部分も工事施工にあたり支障となるので取り壊したいというものであった。そこで益田市教育委員会は、昭和58年7月豪雨災害に伴う復旧工事という事業の性格をも考慮のうえ、開発との調整を図るために資料を得るべく発掘調査の実施を決定した。調査の期間は、昭和59年9月1日から同年10月13日までである。

なお、島根県教育委員会の指導と米子鉄道管理局の理解を得て、古墳にかかる部分の工法は変更され、調査後は埋戻しのうえ保護することとなった。

II 位置と周辺の遺跡

益田市は、島根県の最西端に位置し、商工業を基盤とする人口5万余の地方都市である。市街地は、益田川と高津川の2大河川によって形成された沖積平野を中心に広がり、西は山口県と接し、周辺部は三隅町、美都町、匹見町、日原町に隣接する。

古来より、北九州や山陽地方を結ぶ交通の要衝という地理的条件を備え、歴史を溯ってみても、特に山陽地方との交流は深い。また、近代では国営農地開発事業をはじめとして、大規模な開発が急速に推し進められつつある地域でもある。

さて、鶴ノ鼻古墳群は益田市街から北東へ約5km、小河川によって形成された津田と遠田の平野部と挟まれるように海岸までせまる丘陵の最先端に位置する。石見地方における主要遺跡のひとつとして広く知られ、50数基の古墳で構成されていたといわれる古墳時代後期の典型的な群集墳遺跡である。昭和33年には比較的保存状態の良き19基が島根県指定史跡となり、昭和58年度に実施された詳細分布調査では指定外に新たに12基の古墳が確認

されている。

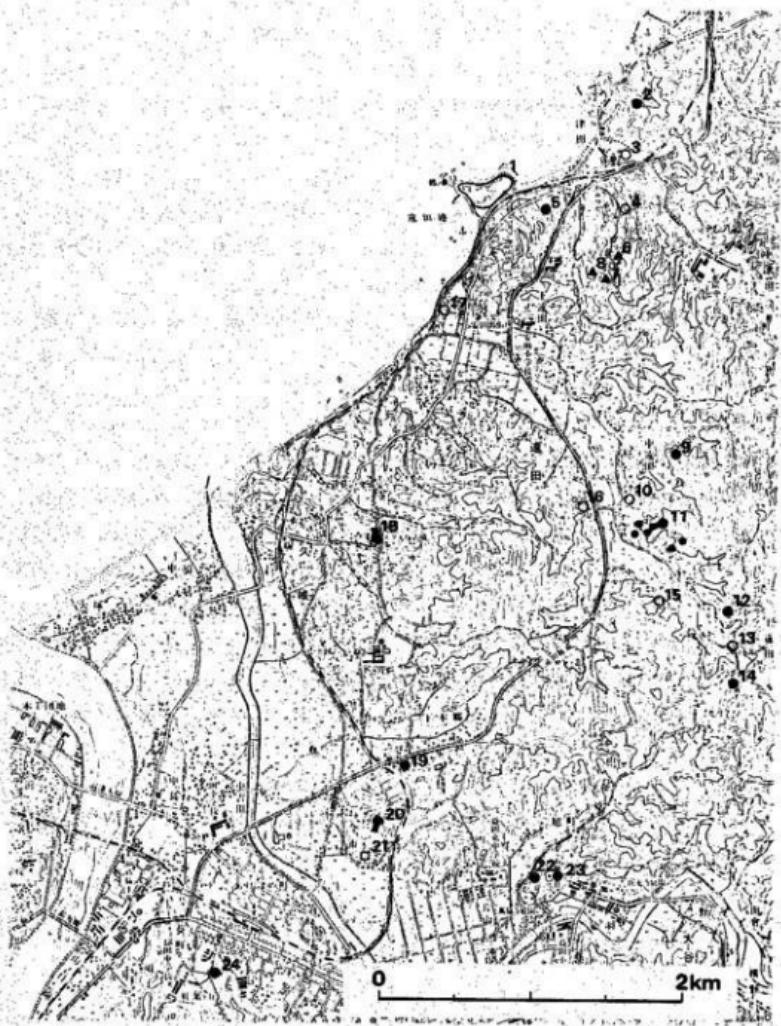
調査の対象となった古墳は、益田市遠田町4158番地に所在し、「全国遺跡地図－島根県－」に登載されているこの鶴ノ鼻古墳群（遺跡番号1687）の範囲に含まれる。国鉄石見津田駅から市道中島津田線に沿い西へ約0.5kmのところ、山陰本線南側に宅地に囲まれるようにして残る畠地の一角に存在していた。

『益田市誌』によれば鶴ノ鼻群の周辺には次のような遺跡が知られている。

須恵器散布地として、日ヶ迫遺跡、杉迫遺跡、染ヶ迫遺跡などがあり、いずれも須恵器窯と指定されている。また、昭和56年度に本片子遺跡の調査がなされ、窯跡が検出されるとともに瓦の生産も行なわれていたことが明らかにされた。益田市周辺に古代寺院の存在を想定できる貴重な調査内容であった。

他に、峠山遺跡、水雲島遺跡、スケ入道遺跡も土器散布地として知られるが、現在ではト器の種類、構造等不明な点が多い、津田川のさらに東を流れる沖田川沿いには弥生時代中期の井元遺跡が発見されており、これらの中には弥生時代以前に遡る遺跡もあるかも知れない。

古墳については、津田を囲む丘陵上に峠山古墳、上ノ峠古墳、寺ノ前古墳、水雲島古墳、大道古墳が点在し、遠田川河口の両岸にはウエ古墳、前浜古墳、海平古墳、木屋ヶ森古墳などがある。



第 1 図 古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

III 発掘調査の概要

調査の対象となったのは古墳1基である。事業者との協議により、記録保存を前提にした全面発掘調査として着手したが、工事と並行して進めなければならないなど諸条件に制約され、特に周辺部の調査が不充分とならざるを得なかった。さらに、古墳から南へ約10mのところに、人頭大の石で築れた塚が存在していたが、工事用進入路の設置により調査時にはすでに削り取られてしまっていた。径は約2mで、地元の古老によれば山伏堂と呼だれています。

なお郷土史家矢富熊一郎によって著わされた文献と分布図を参考にすれば、この古墳は、鶴ノ鼻古墳群中の第50号墳にあたると考えられた。

古 墳

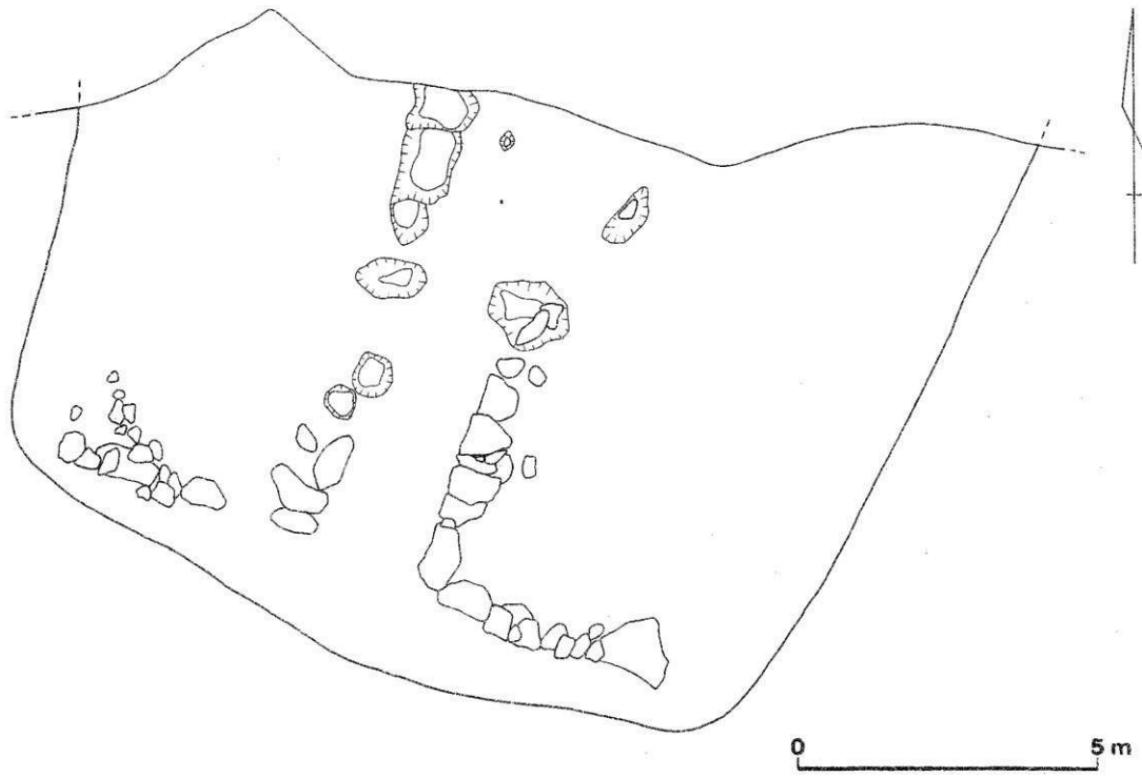
古墳は最高位で約2mの比高を保ち、畠地中にあって明瞭にその高まりを残していた。墳丘東側はややふくらみをもって下がってゆき、その端はほぼ垂直に畠地面に落ち込んでいる。あるいは後世の削平によるとも思われたが、墳頂から流れた土砂がここに堆積したためであることが後に判明している。中央から西にかけての部分は一段低くなった状態で全体にゆるやかに南へ下ってゆく。墳丘の南東には割石による石垣が認められたが、これは明らかに後世のもので、土留めとして築かれたのである。

一方、古墳の北側は土砂崩壊によってかなりの部分が失われた様子で、その崖面には石室に用いられていたと思われる石材数個が露出していた。山陰本線の堀割りが徐々に崩れて古墳に及んだためである。

調査は主体部を検出することから始めたが、周辺部を掘り進めるにつれて、古墳の裾部は良好に遺存していることが次第に明らかとなった。

裾線は南東にコーナーを持って北へほぼまっすぐに伸びてゆく。さらに南側についても中央でやや外にふくらみながら後述する石列に沿って裾が検出されたが、それもやはり南西部ではば直角に折れて北へ向かうようである。

このような状況から、もとの墳形は方墳であったと考えられるが、その規模は完存する石室前部の一辺が約13mを測る。



0

5 m

石室

文献による破壊の経緯と現状から、この古墳の石室に関してある程度の破壊は当然受けているものと予想されていた。発掘調査の結果、主体部の横穴式石室が石材をほとんど失った状態で発見された。石材は羨道の基底にあたる部分にのみ検出さを、一部に2段の石積みが残されていた。

玄室部分には、石材が据えられていたと思われる痕跡が何箇所かに認められたが、石室全体の平面形を指定するには不明瞭なものであった。なお、羨道左側の延長上で、羨門にあたるとと思われる付近に、内弯する面を内側に向けた自然石があった。床面から約30cm下位に置かれた状態で、あるいはすでに移動した石材とも考えられたが一応図化しておいた。

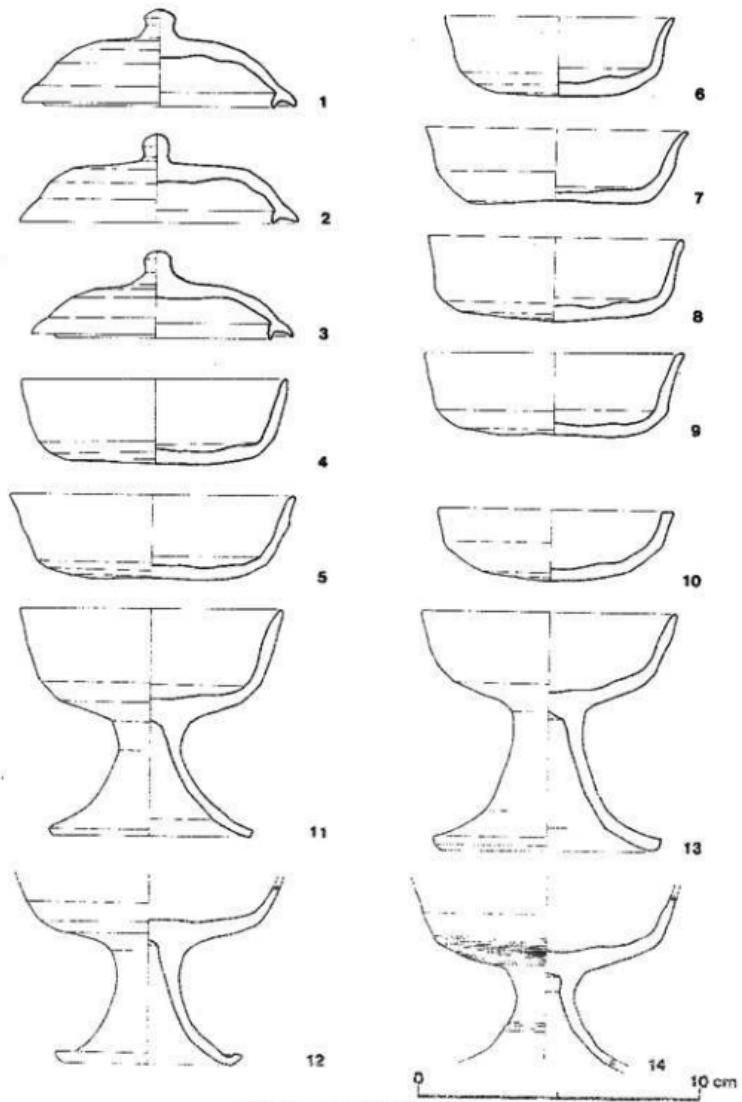
現存する羨道部の規模は、幅1.7m、右側壁の長さは3.7mを測る。

石列

羨道入口から左右にそれぞれ約4.5mにわたり石列が検出されている。石室床面と同じレベルで、主軸線に対してほぼ直角に築れており、流土により一部がせり出してはいるものの、直線上に前面を描えることを意識しているように看取れる。また、羨道左前端の石材の前面を共有しねいことも注意される。

東側の石列には西のそれと比較してより大型の石材が用いられ、東端には前面の幅が1.5mに及ぶ割石の良材が置かれている。西の石列背後には数個の小さな自然石が認められたが、これらは盛土内に存在するものであった。石列の一部には2段に築かれた箇所があった。

この石列は前面にのみ設けられた施設で、古墳の周囲を巡っていたような痕跡はなかった。



第3図 出土遺物実測図

IV 方基円墳について

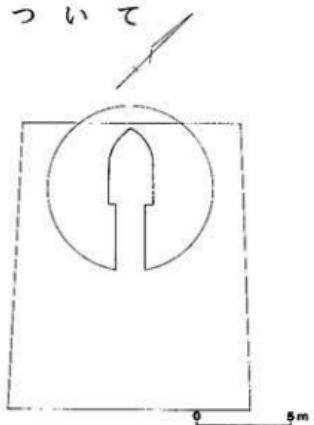
ここで、鶴ノ鼻古墳群にあって、きわめて特異な墳形として注目されてきた「方基円墳」についてふれておくことにする。

方基円墳とはいわゆる上円下方墳と考えて良いだろうが、『島根県史』を著した野津左馬之助は両者を区別してそれを定義したうえで、鶴ノ鼻古墳群中にその存在を指摘した。そして、郷土史家矢富熊一郎は古墳群の分布図を作成した際ひ、これを第50号墳として位置づけている。しかし、現在では文献をたよりにその内容をうかがい知るに過ぎないのが実情である。

さて、『島根県史』第3巻によれば、その概要は次のとおりである。

『墳丘は梯形の平面周囲の基底に、約、元の高さに石垣を築成せり、前面の幅十三、左右両側の長各十四……、此梯形方基の上に築かれたる墳丘は、圓墳にして………、石室は略は南方に向て開口しあれるも………、羨道部は幅一、元長さ三、五玄室中央の直徑四、二弧形を描ける左右両石壁の長さは各五、一玄室入口の左右袖なる石壁は各、四の幅さを有ち、高さ二、二あり左図の如し。』

この図を矢富熊一郎による諸文献の記述を参考にしながら、数値の比率を勘案しね描き直したのが第4図である。



第4図

V おわりに

今回の調査によって、益田市において始めて方墳が確認された。しかも、鶴ノ鼻古墳群の中に存在することは古墳群全体の性格を考えるうえできわめて重要な意味を持つと考えられる。最後に、調査結果をふまえて若干の策を加えながら問題点を整理しておきたい。

発見された方墳は、少なくとも一辺が13mの、比較的小規模なものであった。さらに益田市のみならず石見地方での初例となった。益田市では他に、乙吉町所在の叶屋上古墳に方墳の可能性が示唆されていたが、これについては最近の分布調査によって城跡の可能性が強いとされている。

また、本古墳が仮に第50号墳に符合するとすれば、いわゆる方基円墳に比定されることになる。工事用進入路の設置により周辺部の発掘が不充分であったため、東と南を重機によって掘削して地山の観察を行なっているが、いずれも現地表に従うように地山が認められ、石室前方に7m前後のテラスが存在しているとは思えなかった。また、墳丘自体にも円墳部から底基に移る変化点といったものは発見できなかった。このような状況から、本古墳は今のところ方墳までにとどめざるを得ないであろう。

埋葬施設として横穴式石室が検出されたが、大部分の石材は抜き取られ、溝道の規模は先の方基円墳のそれにきわめて近似している。

さらに、石室前面の石列は、わずかではあるが広島県北部の山間部に散見できるものの、県内では他に類例を見ない外部施設である。その性格については今のところ不詳である。

出土遺物には、須恵器、耳環、銅鏡、鉄製品などがあった。築造時期を考えるため蓋杯を例にとれば、蓋部には乳頭状の小さなつまみを付し、内面のかえりも短く鋭いものが中心になる。口径はだいたい10cm前後を測る小型の器種である。これはおよそ7世紀中頃にかかるものと思われる。

本古墳を中心に、鶴ノ鼻古墳群が形成された当時の社会的な時代背景にせまり、古墳群の築造過程を究明することが必要と思われたが、今回はそこまで至らなかった。また、古墳群周辺に分布する諸遺跡との関係も明確にしてゆかねばならない問題である。

参考文献一覧

1. 1924 野津左馬之助 『島根県史』第3巻 島根県史編纂掛
2. 1941 矢富熊一郎 『安田村発展史』上巻 安田村図書館
3. 1950 矢富熊一郎 『鶴ノ鼻古墳群』 安田村公民館
4. 1952 矢富熊一郎 『益田町史』上巻 益田公民館
5. 1958 大川清 田中義昭 西垣丹三 『島根県益田市西平原窯跡址』『古代』29・30合併号
6. 1960 山本 清 『山陰の須恵器』『島根大学開学10周年記念叢書』7. 1963 矢富熊一郎 『益田市誌』 益田郷上矢富会
8. 1963 山本 清 池田満雄 近藤 正 東森市良 『島根の文化財』第3集 島根県教育委員会
9. 1966 池田満雄 『古墳文化の地域的特色－山陰－』『日本の考古学』IV 河出書房
10. 1968 山本 清 『新修島根県史』通史編1 島根県
11. 1974 前島己基 『益田・北長迫横穴群』『島根県埋蔵文化財調査報告書』第V集
12. 1975 矢富熊一郎 『益田市誌』上巻 益田市誌編纂委員会
13. 1978 桥山純夫他 『古代の石見』 八雲立つ風土記の丘
14. 1978 文化庁文化財保護部 『ゼ国遺跡地図－島根県－』
15. 1980 山本 清他 『山陰古代史の周辺』下巻 山陰中央新報社
16. 1982 田中義昭 『益田市西平原窯跡群の意義について』『ふいーるど・のーの』No.3 本庄考古学研究室
17. 1982 勝部 昭 戸宗寿雄 『本片子遺跡・木原古墳』 益田市教育委員会
18. 1983 田中義昭 『石西地方における横穴墓の形態の時期』『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学
19. 1984 益田市教育委員会 『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概要』

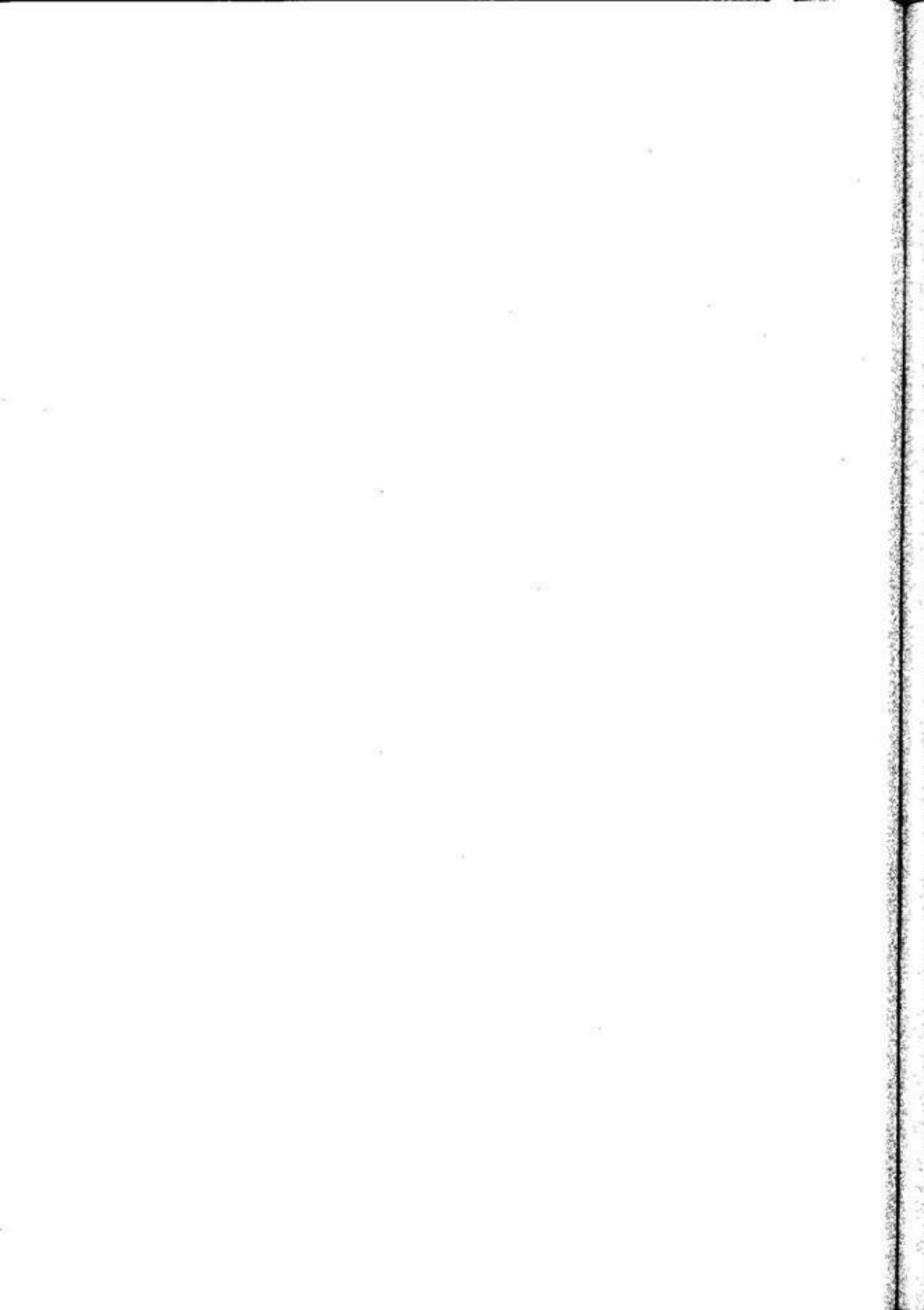
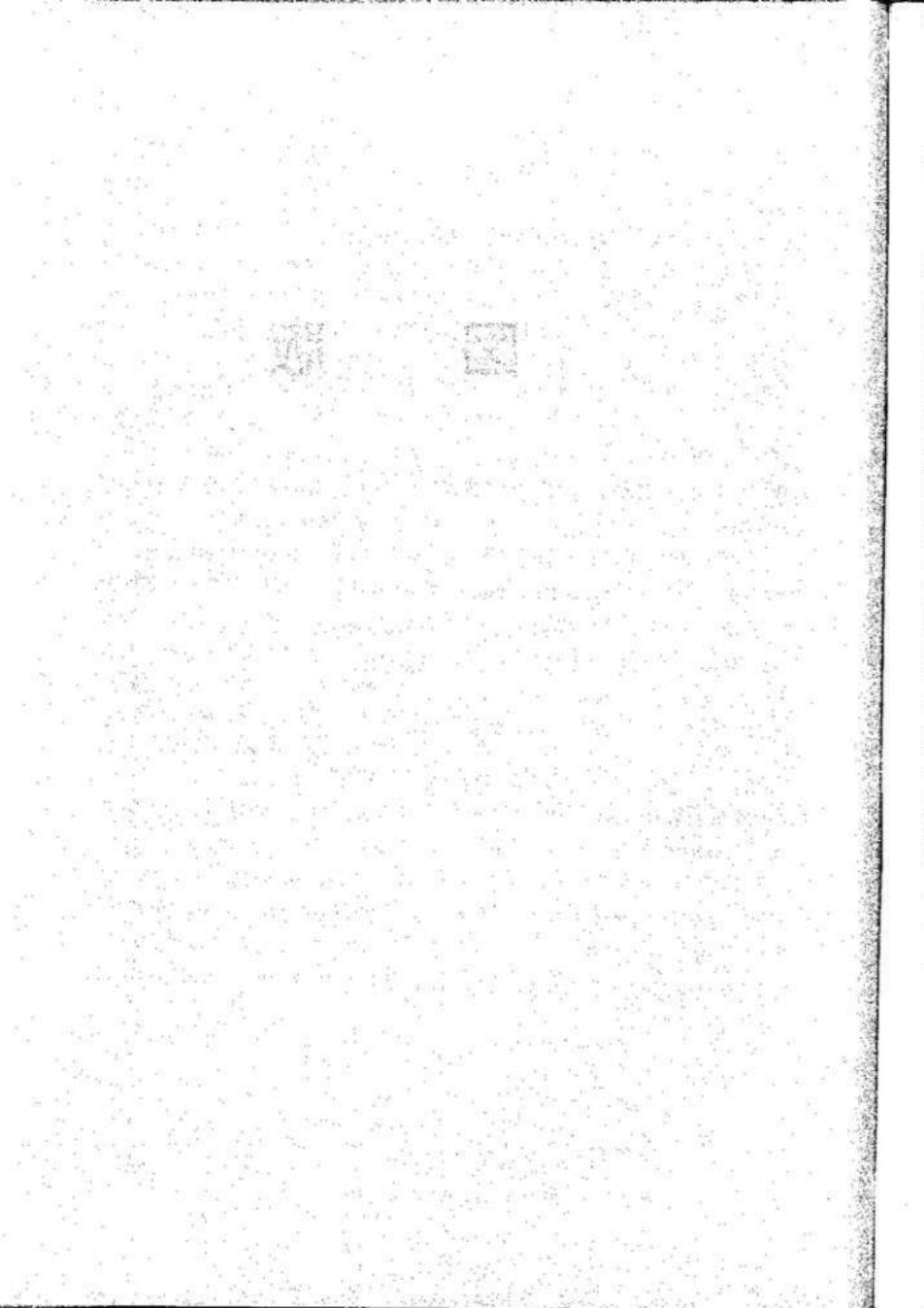


図 版





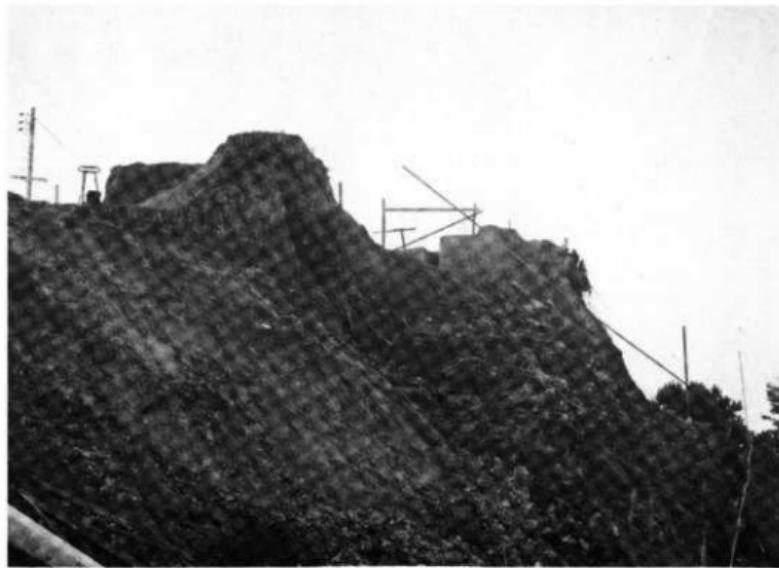
調査前全景(南から)



北側崖面の状況



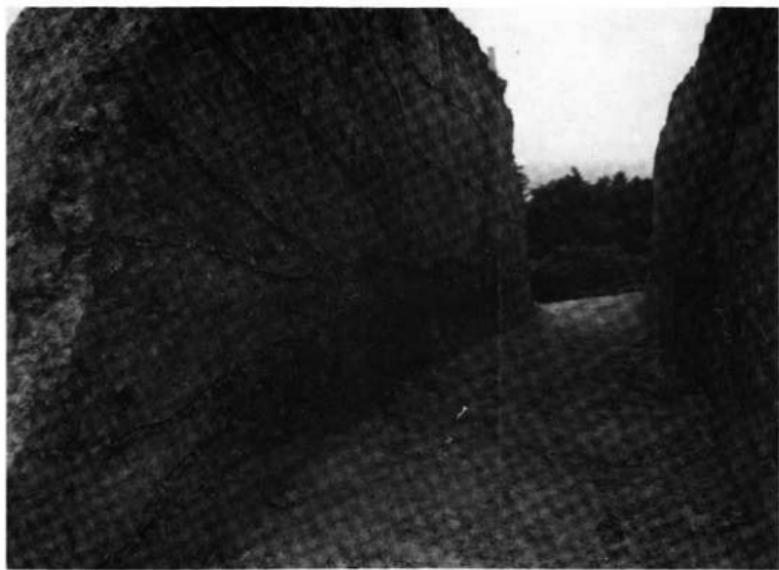
作業風景



工事状況



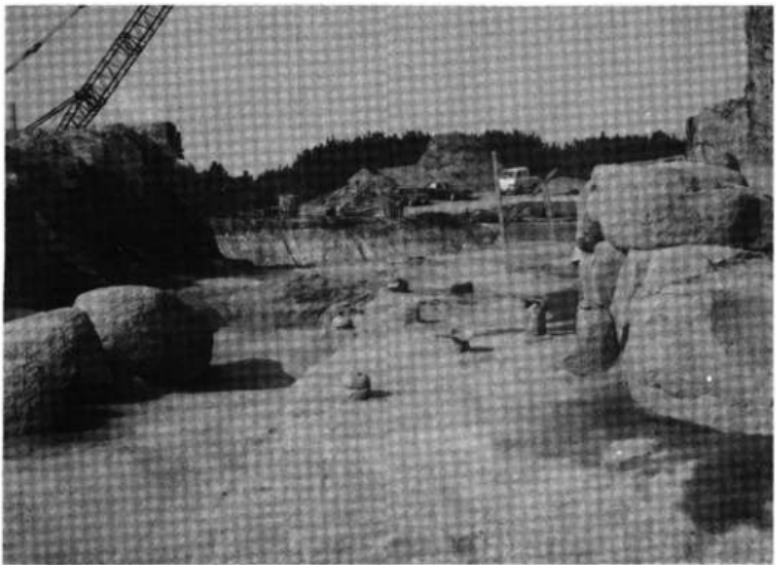
西側墳丘土層



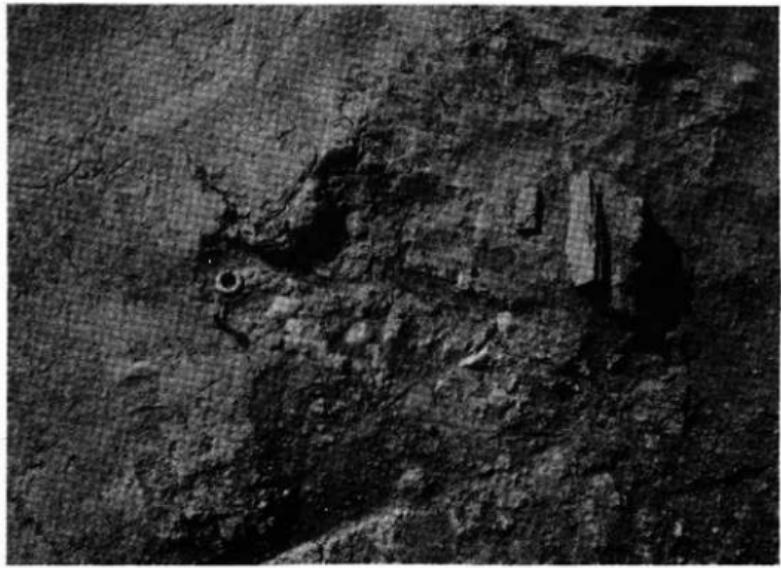
東側墳丘土層



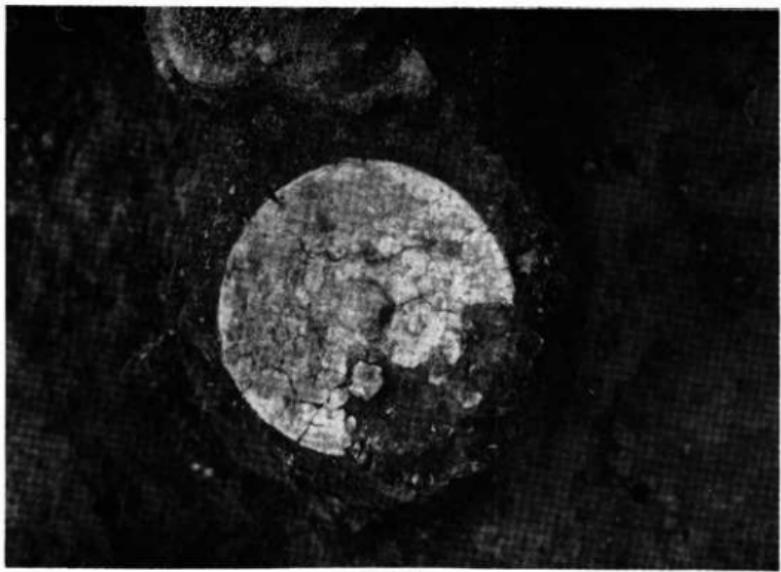
削石混入状況



遺物出土状況



耳環・鉄製品



乳文鏡



発掘調査後の状況



石列検出状況